

冒頭、ご自分の経歴を話された。若い頃は化粧品会社の宣伝部で広告デザインを作っていたが、当時は高度成長期で、新聞や婦人雑誌の広告を大量に毎日のように作っていたし、木暮実千代さんや浜美枝さんなどの撮影立ち合いもあれば、一緒に食事をすることもあって、いい思い出も多かった。ただ週末になると人が変わって、上野発 22 時何分だったか、鈍行長岡行に乗って谷川岳、一ノ倉に毎週行っていたとのこと。因みに、2012 年の時の講演会報告（「山」811 号）には、「16 歳の時にデザインと山登りの二つの世界に同時に出会い、以来二足のわらじを 50 年」と書かれている。そうした仕事をしてきた 20 代終わり頃に、山と溪谷社の『岩と雪』編集部から、表紙のデザインと扉のエッセイを書いてくれないかという話が舞い込んで来た。

『岩と雪』はそれこそビリビリになるくらい読んでいたクライミング雑誌で、当時は勤務デザイナーだったが、仕事よりそっちの方が楽しくなってしまった。山岳書はそれが始まりで、もう 48 年になる。『岩と雪』は節田さんからの依頼ではなかったが、節田さんとはその頃から編集者として今までの長いお付き合い。その後は神長幹雄さんと 20 年位になる。

（編者注：講演会時の資料を同封します。そこにお話いただいた山岳書一覧がありますが、紙面の都合もあり、ここではその一部の紹介に留め、主に小泉さんの仕事のスタンスや大事にしていることなどをお伝えします。追ってそれぞれの本に対するお話を作成しますのでご要望ください）

装丁家の仕事とは？—今の仕事と仕事の流儀

装丁家には得意なジャンルがある。私は小説とかハウツーもの（盆栽とか株式とか）、あるいは芸能関係などには手を出さない。今は歳を重ねるごとに圧倒的に山の本で、歴史ものや美術書があっても、年に 1 冊といった感じ。

目の前に雁部さんがおられますが山の歌を作る、詩を書く、絵を描く、あるいは山岳写真家とか、ご自分の専門性の世界と山を結び付けておられる先輩が一杯おられます。私が山の本を装丁するのは、仕事ですが、それだけではないと感じる。そういう方々と一緒に山に登っているように思う。ブックデザインとはブックライミングしているようなことだと。

それと装丁する時に心がけているのは、著者に喜んでいただきたいということで、決して自分の作品を残そうなどとは思っていない。中身に相応しい顔にしたいということです。著者、編集者は小泉に頼めば、そういう本にしてもらえると思って仕事を出してくれるわけです。仕事ではありますが、楽しんでやっています。著者、編集者の期待に応えて、ほんの僅かずつ高みへ球を打ち返したいということでやってきました。だいぶ前にタレントのうつみ宮土理さんが「3 万円の出演料いただいて 3 万円の演技をしたのでは次の仕事は来ないわよ」と言っていたのを覚えています。森英恵さんも「限られた予算で思いもつかない仕事でお返ししたい」と言っていたかと思います。

本の作りと心がけていること

今日は、これまで手がけた本を 20 冊ほど持ってきました。これらについて、どういう作り方をしたか、その思いや、思い出などを話しますが、その前に本の作りについて話したいと思います。

よく皆さんがカバーと言っているのは、正しくはブックジャケットで、カバーとは本体をカバーする表紙のことを指します。だからその造りによってハードカバー、ソフトカバーと言うわけですね。出版社からのオーダーというのは書店で目立つジャケットにして欲しいということで、そこでコストを使ってしまう。私はそれは一色でも良いと思う。むしろ表紙の紙にかける。本の顔といえは表紙です。本門組み、見返し、扉、それらの組み合わせを懸命に考えるのです。そういう点を感じ

じ取って欲しいので若手にはそう話しています。

それと“本は現場で作るものだ”ということ。私は印刷の現場に行くのが大好きです。職人さんの物言いはストレートですが、知識は豊富で、どんなことにも的確に答えてくれる。

気を付けていること（忘れちゃいけないと自分に言い聞かせていること）

自分の大好きな登山家の本、大好きな山の本の依頼が入った時が一番危険。どうしても舞い上がってしまうとか、自分が誰よりもこの人を知っていると思いがあって、アイデアがたくさん湧いて引き算ができなくなる。アイデア、デザインは一つだぞと言いつつ聞かせる。削って削って捨てるんだぞと解っているが、愛情が深い分ラブレターが度を越していると後で気づく。以前ここでお話した時に、図書委員で本も出されている飯田年穂さんが「エレガントでいいね」言って喜ばせてくれたが、後で「小泉さん、エレガントの語源はラテン語で削り取るという意味があるんですよ」と教えてくれてびっくりした。

母方の祖父は、いつも和服のイメージの明治生まれですが、初孫の私を可愛がってくれて、よく高尾山や野猿峠に連れて行ってくれた。6歳の頃、その祖父から「みっともないことをしてはダメだよ」と言われました。よく分からないでいましたが、駅やホームで駆けるとか交差点を走って渡るなんてことは、いなせな祖父にとってはみっともないことなんですね。それが祖父のダンディズムだったのでしょう。この教えがデザインの底流にあるように思う。「デザインしすぎない、描き過ぎない、手を入れない、削りを途中で止めない、自分の作品を残そうなんて思うなよ」といったことです。これをポリシーと言いつつここ数年は、みっともないですが。

では幾つか本の思い出などを。まずは、田中澄江さんの『私の好きな山の花』で、この中では一番古いかと思えます。この本には田中さんの息子さんの奥さん、お嫁さんですね、その三田恭子さんが描かれた山の花の絵が全部に出てくるんですね。それで、ああこれには花の写真は使えないなと思いました。それでエアブラシで、山のような、こんなものを書いてジャケットにしました。→
(紹介した本を皆さんに見ていただこうと、客席の皆さんに回した)



次に、木下好枝さんの『私の奥飛騨』。これは写真集ですが、この時はお住まいの高山へ行って35ミリフィルム約1000本（36000カット）を全部見て、その中から300枚くらい焼いて送ってもらって、そこから選びました。木下さんの思い出もあるから。こちらの思いと相入れないこともある。写真集の場合は往々にして写真選びの場面で、喧嘩まではしないけど、本当に一生懸命になりますね。

続いて船尾美津子さんの『立山のふもとから』です。船尾さんという方は、東京の豊かな家庭の生まれですが、大阪在住時にアルペンルートに行き立山を見て人生が変わっちゃうんですね。大阪から毎月立山に行くんです。そして離婚されて、有峰口に住んで、地元紙にエッセイを書いていた。文章は書き過ぎない、押し付けがない。読んでみて、この本にはカラーは使いたくない、帯もなし、そう思いました。ご本人は本（ジャケット）が派手な写真だったら嫌だなと思っていたようですが、届いた本を見て良かったと泣いてしまったと聞きました。船尾さんには紫のイメージがありましたが、初めて東京で会った時に赤紫のワンピースだったので驚きました。

次は残念ながら今日はお越しいただけないのですが、大森久雄さんの3冊。全部違う出版社からというのが凄い。横山さんと大森さんというと、私にとっては山岳図書の9000m峰みたいな大先輩

で、お会いする前から憧れていたお二人です。

ご本人には言えませんが、大森さんの文章は難しいレトリックは使わず、易しい表現だけれど、書いてある内容が密で、さらさら読めるが山と読書の経験が試されているような素晴らしい世界だと思う。『本のある山旅』は、ハードではなく、しなやかなソフトカバーで、真っ白な本にしたいと思った。写真は新妻さん。余計なものが写り込んでいなくて、無駄がなく、3mmの断ち落としもできないので周囲に余白をとった。苦労したのはキャプションで、どんな字体でどこにと考えて、字間を空けた。『山の本 本の旅』は会報「山」で最近紹介されていましたね。これも白いカバーで、表紙は一色刷りですがヨーロッパアルプスの地図を使った。次の『山の本歳時記』ですが、コロボックルヒュッテの手塚宗求さんが『山と溪谷』で図書紹介を書いています。そこでは“帯の色がたまらなく好きだ”と長々書いてくれました。山岳書と言えば3千部とか5千部の発行ですが、そういう所まで見てくれる人が一人はいるんだと思いましたね。

このように、手がけた本を手が我が子を見つめるような表情で、本作りのこと、装丁での嬉しかったこと、苦労したことなどを語っていただきました。知らなかったことも多く、大変ためになりました。何気なく手にしている本ですが、カバーをとるとまた違った顔が見えること、如何に多くの人のご苦労があって本が作られているかということを知りました。本に対する思いを新たに出来た講演会となりました。最後に小泉さんを囲んで記念撮影して終了としました。

※同封の当日お持ちいただいた本の一覧の中には、実際にジャケットなどを見ていただきたいものも多くありますので（画像を入れるとページが増えることもあり一部紹介にしました）、前述のように今後作成するエピソード集をお楽しみにしてください。（荒井正人）



参加者

（緑爽会以外）＜JAC 会員＞横山厚夫、杉本賢治、雁部貞夫（輝子夫人と）、節田重節、河野悠二、小野正男、高橋重之、高橋郁子、菅沼満子、今田明子、田村典子、坂本克彦、高砂寿一、井上優美、北島洋一、
くたをり同人＞海津正彦、齋藤国一、＜東京徒歩山溪会＞小泉美江（小泉夫人）、北村敏郎、石田喜代子
（緑爽会）山口節子、神崎忠男、松本恒廣、近藤緑、吉田理一、渡部温子、川嶋新太郎、高辻謙輔、
平野紀子、大島洋子、島田稔、小清水敏昌、富澤克禮、石塚嘉一、中村好至恵、荒井正人、小原茂延、
小林敏博
（写真撮影：石塚嘉一、集合写真提供：田村典子）

11月山行 奥多摩の紅葉散策ハイキング

石井 秀典

実施日：11月24日（金）

参加者：11名（写真参照、写真撮影：この項全て石塚嘉一）

奥多摩の紅葉散策は、一昨年の日原鍾乳洞、昨年の JR 奥多摩駅～白丸駅間散策に続いての実施だ。今回は大多摩ウォーキングトレイルと言われる JR 古里駅から奥多摩駅までの多摩川沿い約 8.5 kmの道を紅葉を観賞等しながら散策した。

古里駅前に集合した。青空が広がり山肌は黄色に色付いて素晴らしい紅葉鑑賞が期待できそうだ。駅前広場で案内担当の石井が本日の行程を地図にて説明し、予定どおり 9 時 30 分に出発。古里駅前の青梅街道を 10 分程歩き左に分岐する「旧青梅街道」に入る。旧道には昔の街道の姿が残されていた。平坦地がないことで石垣を高く積んで建てた家が並び、道沿いには湧水が流れ込む共同生活飲料水の「釜の水」があり、歴史を感じる石仏や石灯籠が存在する。集落の外れで多摩川に落ち込む「清見滝」が目に入った。往時には御岳山や一石山（日原）への参拝者が身を清めた滝で、その名が付けられた。また別名を「古里府の滝」と言われて「古里」の名称の起こりと言われる由緒ある滝だ。



数馬峡橋近くの休憩所で

（後列左から）鳥橋祥子、栗城幸二、大島洋子、西谷可江、藤下美穂子、石塚嘉一
（前列左から）富澤克禮、田村佐喜子、島田稔、辻橋明子、石井秀典

集落が終わり多摩川に架かる「寸庭橋」を渡る。橋から見下ろす多摩川の河岸は、江戸時代には奥多摩で切り出した一本流しの材木を筏に組んで江戸の町に運ぶ「土場」であった。奥多摩は江戸に供給する材木の一大産地であり、古里周辺は材木出荷の元締め、筏師（仲買人）、筏乗りなどで相当に賑わっていたようだ。往時の歴史を思い描きながら古里の集落を後にした。

寸庭橋からは山道歩きとなる。橋から多摩川の河原に下る。支流の寸庭川、越沢のホタル橋を渡ると、次の集落鳩ノ巣へ行くための山越え道となる。標高差 100mの松ノ木尾根への登りが始まる。眺望が全くないジグザク道を休憩しながら約 30 分の登りで「松ノ木尾根展望台」に到着。展望台からは北側の眺望が開けて、本仁田山（1224m）などの奥多摩の山々が、眼下には将門平と称される棚沢集落が広がる。棚沢集落には平将門伝説が数多く存在する。



松ノ木尾根からは一部舗装された林道を坂下集落に一気に下り、多摩川に架かる「雲仙橋」を渡る。雲仙橋からは紅葉の鳩ノ巣溪谷の絶景が眺望されて写真撮影が忙しい。雲仙橋から再び多摩川の河原に下る。途中の岩場に「鳩ノ巣」の名称由来の説明看板があった。奥多摩の材木を江戸に運ぶ飯場小屋近くの水神社に仲睦ましい2羽のハトが巣を作り人夫達が愛護したことで名前が広がったとのこと。溪谷の名所「鳩ノ巣小橋」の吊り橋を渡り、溪谷の河原を歩く。足下に気を付けて溪谷美を觀賞しながら約 15 分の歩きで鳩ノ巣溪谷は終了した。遊歩道に上がるために急な石段を登る。足場が悪い石段なので慎重に登ると、東屋のある休憩所に到着。12 時が過ぎて少々遅い昼食時間とした。

昼食後は、快適な白丸湖畔遊歩道の歩きである。約 5 分で「白丸ダム（正式名は白丸調整池ダム）」の入口通路に到着。大変に残念であるが白丸ダムは今月初旬からダム点検工事が開始され堰堤が通行止めとなった。そのために期待していた白丸ダム魚道の見学ができないので、次の機会に案内することを伝えて遊歩道を再出発した。工事中の白丸ダム堰堤とダム湖が見えたことで多摩川の発電所のことを説明した。多摩川には 4 か所の発電所がある。小河内ダム（奥多摩湖）の多摩川第 1 発電所、海沢の氷川発電所、白丸ダムの白丸発電所、御岳の多摩川第 3 発電所（白丸ダムからの導水で発電）だ、海沢の氷川発電所はこの先に存在する。

「白丸湖畔遊歩道」は、東京都水道局の白丸調整池ダム巡視路であるが、現在は一般開放されてハイキングロードとして利用されている。遊歩道は湖水側に柵が設けられ歩き易く、湖畔の紅葉觀賞も安全に歩けた。今回の白丸湖（ダム湖）は全く波がなくエメラルドグリーンの鏡のようだ。紅葉の赤や黄色が湖水に映り錦模様で素晴らしい風景が観られた。また紅葉が湖面に浮かんだモミジイカダも美しく足を止めて觀賞。錦秋の景色を満喫することができた。

白丸湖遊歩道は、白丸駅近くの多摩川に架かる「数馬峡橋」で終了。参加者の辻橋さんと大島さんが用事等で白丸駅から電車で帰宅するので、ここで別れることとした。

数馬峡橋からゴールの奥多摩駅までは、今年の紅葉ハイキングで歩いた道だ。多摩川の流れを右に見て「数馬峡遊歩道」を歩く。このコースは奥多摩町の森林セラピーロードの一つであるので、森林セラピーの説明を行った。全ての樹木はフィトンチッドという揮発性の物質を発生している。いわゆる樹木の香りだ。その物質を人間が吸うことで免疫力向上、ストレス軽減などの効用がある

ことを医学的なエビデンスが整理された。森林浴と同じ内容であるが、森林を医学等でも積極的に活用しようとするものである。参加者にはフィトンチッドを沢山吸収して貰うために深呼吸を行った。

数馬峡遊歩道は数馬西トンネルを抜けると終了。正面の山肌には「氷川発電所」の太い鉄管が見える。山の上に小河内ダムから長い導水管が通じて貯水池があり、落差 107mの水圧鉄管に水を流して発電している。発電所からは奥多摩駅への長い車道歩きだ。舗装道路は疲れた足には辛い歩きであったが、参加の皆さんは元気に歩いて 14 時 50 分に奥多摩駅前に到着した。駅前広場で解散式を行い 15 時 21 分発の電車に乗り、拝島にてご苦労さん会を実施した。

(参考・コースタイム)

集合・JR 古里駅 9 : 30→寸庭橋 10 : 10→越沢ホテル橋 10 : 30→11 : 00 松ノ木尾根展望台 11 : 10→11 : 20 坂下集落 (トイタイム) 11 : 30→雲仙橋 11 : 35→鳩ノ巣小橋 11 : 50→11 : 55 鳩ノ巣溪谷 12 : 10→12 : 20 東屋 (昼食) 12 : 50→白丸ダム入口 12 : 55→13 : 30 数馬峡橋 13 : 40→数馬西トンネル 14 : 10→氷川発電所 14 : 20→奥多摩駅前 14 : 50 (解散) (写真：石塚嘉一)

久し振りの紅葉狩り

西谷 可江

雲ひとつない碧空。小春日の日差しに、粧う山を眺めつつ古里駅前を出発。柚子実る旧青梅街道に入れば、民家の古い石垣。釜の水、筏通し、土場など、奥多摩に詳しい石井様の名ガイドで古里の歴史を学びながら寸庭橋を渡って多摩川右岸に進む。5年間山歩きできなかった萎えた私の脚には、湿った岩の道、走り根の道は全神経を集中しての一步一步。「川鳥の声です。」と石井様の声はすれど、鳥声は耳に届かず。岩間にはユキヤナギの黄葉。奇岩、巨岩の鳩ノ巣溪谷の絶景に歓声を上げ、東屋で昼食を摂れば今までの緊張が一気に解ける。白丸ダムの工事中的鈍い音を耳にしながら深いエメラルドのダム湖に映る紅葉、黄葉に暫し見惚れつつ、これから何百羽も訪れるというオシドリを想い描く。ダム湖沿いのセラピーロード。足に優しく、石井様の「樹木が発散するフィトンチッドを吸って皆さんのNK細胞が2倍になりましたよ。」の声に思い切り深呼吸する。日没には2時間もある日差したっぷりの、本日のゴール奥多摩駅に到着。オオタマウォーキングトレイル 8.2 km完歩。

「眼つむれば今日の錦の野山かな」

高浜虚子

眼をつむれば、燃えるイロハモミジの紅葉と御高齢の島田様、田村様のお姿が鮮明に浮かぶ。改めて自然の大いなる恵みに感謝し、矍鑠として歩まれるお二方に感動し、貴重な学びを得た紅葉狩りでした。素晴らしい企画、実施して下さった皆様に感謝申し上げます。

※奥多摩駅前の公衆トイレに「PKT」の幟(ピカピカトイレの意)。町では日本一のトイレを指しているとか。因みに今回のトレイルコースのトイレ、「PKT」でした。素晴らしいことですネ。



鳩ノ巣溪谷の紅葉

奥多摩の秋を楽しむ

藤下 美穂子

久しぶりの山道。皆さんについて行けるかしらんと少し緊張しながら参加した。

総勢 11 名である。石井さんの案内で歩き始める。要所要所で石井さんの注意事項や説明を受けて、安心して歩いた。石井さんありがとうございました。だが歩いていないことは身体が反応する。河原への下りでは私もトントントンと歩けない。緊張して降りた。さりげなく栗城さんがサポート



海沢地区からの城山（じょうやま）

に入ってください。有難い。松の木尾根の休憩所までが山道である。休憩所からは青梅の里の景色が一望に。ここで一息入れて鳩ノ巣溪谷に降りる。多摩川にかかる鳩ノ巣小橋が見えてきた。橋を右手に辻橋さんがショットを決めようとする姿。絵になるなあ。それから揺れる橋を数人ずつ歩き対岸に、すれ違う方から健闘を祈りますと言われた石段を慎重に登って東屋に。ここで昼食となる。ここから白丸湖をへて数馬峡遊歩道が素晴らしい道だった。空の青さと山の紅葉を映した多摩川がゆったりと流れている。

落ち葉がゆっくりゆっくり流れていく。歩く私たちも一つの景色だろう。参加して良かったなあ。

多摩川は山間をぬって一筋に流れている。青く青く一筋に。空を仰ぐと真っ青な空、紅葉の山々。奥多摩の秋を楽しませて貰った。最後の車道歩きは田村さんとお話ししながらアッという間について。この駅で解散とならず拝島駅に行く。コンコースから富士山の日没を。丹沢の山々を見ることが出来た。少し離れた大室山がひととき目立った。

一日の終わりにまたプレゼントをもらって素晴らしい一日となった。

忘年会速報

日時：12月16日（土）12時～14時半 場所：「西安」市ヶ谷店

参加者：24名（写真参照。写真には22名が写っていますが、所用で早く帰られた近藤裕さんと、渡部温子さんも参加されました）

遠方からは平野さん、久しぶりということでは、西谷ご夫妻の参加があり、田井さんや川口さんもこうした場には久しぶりの参加であった。24名の参加は、今年の行事ではもっとも多く、テーブルのあちこちで話に花が咲いていた。当日は新潟の銘酒「八海山」が持ち込まれた。吉田理一さんが、秋に近藤緑さんへ「八海山」を贈っておられたお酒であるが、近藤緑さんは「吉田さんは緑爽会の皆さんに飲んでいただくことを望ましいと思っていると思う」と、持ち込みを提案されたのだった。思わぬ差し入れに、呑める人は美味しくいただき感謝であった。

その近藤さんの乾杯の発声からしばらく歓談し、皆さんから近況を話していただいた。

最高齢の近藤裕さんは、故郷の鳥取県大山町で昭和20年に起こった、米軍機による通勤通学列車襲撃を経験されている。死者45名という中で、ケガだけで済んだ近藤さんは今も戦争体験の語り部として故郷でお話をされているそうだ。川口さんも宮古島に行ってきたとの話の中で、国際緊張を感じたと語っていただいた。

南川さんは『山岳』に書かれた木暮理太郎のことに触れ、こうした調査研究の後継者の出現を望んでいると話された。近藤緑さんも『山岳』の山本良三会員の寄稿に対する思いを語られた。

富澤さんは今年の緑爽会の行事には全て参加したと、高尾山の健康登山も78冊となったお元気な行動派らしい発言だった。竹中さんは東京多摩支部の古道調査で鎌倉街道山の道を16キロ歩いたとのこと。平野さんも近くのスキー場がオープンしたのでちょこちょこ滑っていると。山川さんは「さがみこベリーガーデン」グランドオープン2年目に向けた抱負、松川さんは高尾の森の取り組み「鹿対策」を、小原さんは来年5月の全国支部懇談会に絡む話をされた。振り返れば10月の大菩薩に続いて奥多摩も田村さんと島田さんが歩かれたし（島田さんはさらりとウォーキングされてると言っておられたが凄いことだと思う）、こうして皆さんが山歩きは勿論、文化的なことでもお元気で活躍されていることを知って嬉しく思ったことであつた。西谷可江さんは奥多摩や低山を楽しむ会に参加されているが、最近のご夫婦で出掛けられているということも明るいニュースであつた。

松本さんから緑爽会創立30周年記念事業として、多摩川の河口から源流（最初の一滴）まで歩くのはどうかとの提案があつたが、現在幹事団で検討していることを年明けからお伝えしていきたいと思う。何より、こうして顔を合わせて話ができることの楽しさ、喜びを感じた。ルームでの飲食ができないことで開催してきた暑気払い、忘年会であるが、今後は「第三土曜」「市ヶ谷」にこだわることなく、皆さんのご意見を伺って機会を設けていきたいと思う。

（報告：荒井正人、写真提供：石塚嘉一）



（前列左から）島田稔、川嶋新太郎、近藤緑、田井具世、松本恒廣、梨羽時春、西谷隆亘
（後列左から）小林敏博、竹中彰、西谷可江、松川征夫、小清水敏昌、川口章子、小原茂延、辻橋明子、
南川金一、山川陽一、夏原寿一、荒井正人、富澤克禮、石塚嘉一、平野紀子

日本橋の焼芋屋の倅・荻野音松

南川 金一

『山岳』第一年第三号に載った、荻野音松（1882～1908）の「駿州田代山奥横断記」を初めて目にした時は面食らった。そのタイトルからでは、どこの山を言わんとしているのか分からない。文体が古いこともあり、まごつきながら読んだ。そのルートは、鰍沢から大峠を越えて西山温泉へ下り、下湯島の猟師・大村晃平の案内を得ることができて、山梨・静岡の県境を越えて大井川源流の東俣へ下り、西俣から三伏峠を越えて伊那の大鹿村へと下ったものである。それまで登山者による記録のない地帯であり、その紀行文を纏めるにも、一般に通じるような地名・山名が思い当たらないので、南アルプスという言い方の無い時代「駿州田代山奥」と表現したのだった。

その動機が驚きである。『日本山嶽志』の赤石岳についての高頭式の記述は半頁のところ、「追補」の小島烏水の増補は3頁近くを使って赤石岳を解説している。その中の、伝聞情報として加えてある1行に、「嗚呼此の一行有余の単簡なる注意こそ、余をして此の秘密蔵を開くに至らしめし鍵となりし」というのである。地形図のない時代、案内人を得られるかどうかにかかっていたが、それも現地へ行って見てのことだった。荻野音松は山から帰って、早速、報告のために烏水を訪ねた。

荻野音松の住所は日本橋区本銀（ほんしろがね）町1丁目2番地。特別会員だったから、原稿を依頼するために訪ねた幹事が、その番地に門構えのあるような邸宅を探したが見当たらず、傍らの焼芋屋に聞くと、「私のところが荻野で…」にびっくり。本銀町1丁目は現在の日本橋本石町4丁目、新常盤橋の近く。音松は府立一中を明治33年卒業、同38年東京高等商業（現・一橋大学）本科を卒業して専攻科へと進んだ。府立一中の1年後の卒業生に武田久吉の名前がある。『日本山嶽志』に添付されていた「山岳会設立の主旨書」を読んで山岳会に入会した。明治39年3月であるから、専攻科在学中である。特別会員となったのは山岳会設立の趣旨に共鳴し、会の財政を慮ったことだった。ところが、明治41年6月、論文を提出して専攻科卒業を前に急性脳膜炎で急逝した。

荻野音松が書いた「駿州田代山奥横断記」は西山温泉というベースになる宿があり、頼りになる案内人が得られる、また、悪沢岳という高い山があるという新しい情報をもたらした。小島烏水は翌々年の明治41年西山温泉から白根三山に登った。明治42年には小島烏水ら山岳会の中心メンバーが悪沢岳を目指した。その情報源は荻野音松だったから、烏水は白根三山登頂の喜びをハガキに書いたところ、父親から息子の死を知らせる返事が来て愕然とした。小島烏水は「君の死は我が山岳会の一大損失である」と追悼文に書いた。荻野音松は情報の乏しい山に敢えて挑み、その行為は一見無謀とも見える。しかし、「蓋し日本内地の深山窮谷猛獣の害のごとき殆ど度外視して可、恐るゝ所は只天候あるのみ」と自信をもって述べている。若くしてその心境に達したとは驚きである。

父親の荻野勝五郎からの小島烏水への手紙には「音松は幼少の頃から変人と見られ、小学時代から朋友とするものなく…」「14、5歳ころより旅行を好み、時には深山幽谷にて道を失うようなことを聞いていたが、多少の教育ある身、無謀のこともしまいと、本人の望むままに許していた」と書き、その後、息子の山岳会への思いを汲んで、明治41年11月特別会員として山岳会に入会している。その時の住所は牛込区市ヶ谷田町。焼芋屋はどうなったのだろうか。本銀町1丁目は東京駅と神田駅の間で、その2番地は本稿⑤で書いた高架鉄道の北への延長線上にあり、鉄道用地として買収対象になった。その上を、現在の山手線や京浜東北線が通るようになったのである。本銀町という地名は無くなったが、鉄道架道橋の煉瓦の壁面に「本銀町架道橋」のプレートがあって、そこがかつて本銀町だったことを示していた。

明治 12 年、赤石岳登頂の梨羽時起

小原 茂延

登山を初めてしばらく経った頃から山頂付近で見る三角点に興味を抱くようになった。山行における愉しみになったのは言うまでもない。それからというもの今西錦司の登山や地図に関する文章、三角点にかかる書籍などを探しては読んでいた。

入会した埼玉支部の同好会に「陸地測量部」なるものがあり、故遠山元信氏が地理に詳しく三角点談義に花を咲かせ、県内の三角点から全国区までリストと写真作成に拡大していく作業を始めていた。そんな情報の中で関西の上西勝也氏のことを聞き及び、そのブログ「三角点の探訪」をネットで拝見したところ、一等三角点で標高の最も高い赤石岳の項で目が留まった。

引用すると、「明治十二年八月、内務省地理局の測量方として梨羽晴起、寺澤正明二氏他人夫十五六名の登山あり、同十四年七月測量方、巳和庄助、荒木、吉田(名不明)三氏の他人夫七八名が登った事がある。」[前澤政雄：赤石荒川其の他に就いて「山岳」21年3号 日本山岳会 1927 P68(梨羽晴起は梨羽時起の間違い)]との記載があった。

その後、数年経った頃「会報」目録でシュラーギントワイト兄弟について調べていたところ、前の項目に「曾祖父、梨羽時起のこと」(2008. 10, No761)に目が留まった。早速読んでみると、緑爽会創設時からのメンバーである梨羽時春永年会員が書かれたものである。時春氏は川端康成が自身の作「伊豆の踊子」の発表年月日を長い間錯覚していて、すべての年譜がその誤りを踏襲していた例を挙げ、前述の上西勝也氏が指摘していた「山岳」第21年の記載にある「梨羽晴起」は「梨羽時起」が正しく、2005年発行の山と溪谷社「目で見ると日本登山史、同登山史年表」などが同じ間違いを踏襲しているので注意喚起を促している。

そこで登山史や年表などをあたってみると、登山史に取り組んだ1969年山崎安治の「日本登山史」P152で「…測量登山で最も早く三千メートル級の高峰に立ったのは梨羽、寺沢の二人が赤石岳に登ったのが最初…」と苗字のみの記載、同年発行の安川茂雄の「近代登山史」にはこの測量登山の記載は無いようである。1971年7月の山と溪谷社「世界山岳百科事典」の記載及び年表は何と梨羽晴記と2字の誤記。「日本山岳会百年史」(2007年刊行の別巻年表でも梨羽晴起の記載となっていて残念である。さらに最近の布川欣一著「明解日本登山史」(2015山と溪谷社)に至っては、梨羽晴起としてルビに“はるき”と振っているのには啞然とするばかりであった。一連の誤りの元は、手書き文字で「時」を「晴」と書き写したものと思われるが、正しい名は時起(ときおき)である。

その後、2019年12月の日本山岳会京都・滋賀支部の「支部だより No. 137」で上西勝也会員の『明治初期の測量裏話』講演に「…この測量に従事した内務省の梨羽時起は、初めて3千メートルを超す赤石岳の測量後、海軍に転じ日露戦争の旅順港封鎖で司令官として活躍した。…」とあるように東郷平八郎率いる日本海軍の少将(後に中将)となった旨のことが先のブログが名称を変えた「日本の測量史」に追記されており、司馬遼太郎の「坂の上の雲」に描かれているというので早速読むと、東郷司令長官のもとで司令官として活躍した様子が詳しく描かれていた。ウィキペディアによると後年男爵を叙爵して華族となり、貴族院議員を務めた。その出自は長州藩士、有地信敏の四男として生れ梨羽景介の養子となる。小隊長として戊辰戦争に出陣、1871年鉄道局二等見習いとなり、測量司などを経て、1880年海軍中尉に任官している。家祖は安芸の国の梨子羽時春という。

<お詫びと訂正>

会報 186 号の別冊「戦争末期の尾瀬と上高地」は 163 号、164 号掲載文に加筆していただいたものですが、元々の会報でも訂正をしていなかった点があり、田村会員からご指摘を頂きました。
・五千尺旅館におられたのは「藤原ていさん」とありますが、これは「藤沢タエさん」が正当です。
ここに、お詫びし、訂正させていただきます。

～～《予告など》～～

1 月新年山行 新宿山ノ手七福神めぐり

かつて恒例だった七福神めぐりを復活します。今回は昭和の初期に創設されたと伝えられている『新宿山ノ手七福神』を内藤新宿から神楽坂まで歩いて巡ります。

実施日：1 月 11 日（木） 雨天中止

集 合：東京メトロ丸ノ内線「新宿御苑前駅」改札口³ 10 時 00 分

※ 改札口³は、池袋方面行ホームの新宿駅寄りにあります。

行 程：新宿御苑前駅→太宗寺（布袋尊）→稲荷鬼王神社（恵比寿神）→永福寺（福祿寿）→
巖嶋神社（弁財天）→法善寺（寿老人）→経王寺（大黒天）→善国寺（毘沙門天）→
飯田橋駅（JR 総武線、東京メトロ有楽町線・南北線・東西線）

総行動時間約 3 時間（歩行時間 1 時間 30 分）

※ 少し遅くなりますが、神楽坂で昼食を予定しています（希望者）。

申込先：1 月 9 日（火）までに小林敏博へお願いします。



2 月山行 宝登山で蠟梅や福寿草を鑑賞する

春少し前の時期、花を求めて宝登山(497m)に登ります。12 月から 3 月上旬まで、黄色のロウバイの花が見られます。梅の花、福寿草も見られるかもしれません。秩父鉄道野上駅から歩き、長瀬に抜けける予定です。歩程は約 5 時間です。

実施日：2 月 21 日（水） 集 合：秩父鉄道「野上駅」改札に 9 時 30 分

行 程：秩父鉄道野上駅→萬福寺→長瀬アルプス登山口→天狗山分岐→氷池分岐→野上峠→小鳥峠
→奈良沢峠／林道（昼食）→宝登山北登山口→山頂→宝登山神社→長瀬駅→寄居駅（解散）

申 込：2 月 16 日までに下記へ

藤下美穂子

横関 邦子

なお、3 月も月上旬（6・7 日辺り）に、三浦半島の山歩きと河津桜鑑賞を予定しています。

―― 編集後記

2 月に講演会をと思っておりましたが、諸般の事情で開催まで至らず、やむなく山行に切り替えました。会報も何かと行事が続き十分な時間取れない中、幹事の皆さんのご協力ですべて間に合いました。バタバタした一年を振り返っています。来年もよろしくお祈りします。健康で明るい新年をお迎えください。（荒井正人）

コロナが 5 月に 5 類に移行して世の中はだんだんと普通の状態に戻り、緑爽会のイベントも皆さまのご協力ですべて予定どおり実施することができました。1 月山行はかつて恒例となっていた七福神めぐりを企画いたしました。今年も残すところあとわずか、よいお年をお迎えください。（小林敏博）

<次号予告> 2 月 26 日発行の主な内容

1 月七福神めぐり報告、南川さんの連載⑧、など。皆様からの投稿をお待ちしています。